

あかさたな 第31回所沢こどもルネサンス
第32回 所沢こども文学のひろば

童話 特選作品

かめのおさんぽ

小学一年生

かめのアトラスくんはきょうもかわあそび。

「みずのなかはきもちいいなあ。」

そこへなかよしのめぐみちゃんがきました。

「いっしょにこうえんまでかけっこしない？」

二ひきはよーいどんでかけだしました。

しばらくいくと大きなデラックスくんがやってきました。

「ぼくもなかにいれて。」

こんどは三びきでよーいどん。

どんだんはしっていくとトンネルがありました。ちいさなトンネルで一びきずつしかとおれません。

「じゅんばんにとおらないとね。」

三びきはじゃんけんをしました。アトラスくんとデラックスくんがグー。めぐみちゃんが

パー。

「わたしいちばんね！」

アトラスくんが

「ぼくは三ばんでいいよ。」

といいました。めぐみちゃん、デラックスくん、アトラスくんのじゅんにトンネルをくぐりました。

またしばらくいくとかわがありました。ほそいはしがありました。

「みんなでわたるところわれそう。」

めぐみちゃんは、

「わたしははしをわたりたい。」

といいました。

「ぼくはかわにはいっておよいでわたる。」アトラスくんがいました。

「ぼくはからだがおおきいからジャンプしてとびこえる。」

デラックスくんが良かったです。

ところがピョンととびこえようとおもったデラックスくんはちやくちにしっばい。かわにおっこちてうらがえしになってしまいました。およいでわたっていたアトラスくんがデラックスくんのしたにもぐってこうらをおしてもとどおりにしてあげました。

かわをわたった三びきはのはらのみちをどんどんはしっていきましました。さかをのぼったさきにくだりのかいだんが一だんありました。

「こわくておりられない。」
とめぐみちゃんがいました。

「いいことおもいついた。」
デラックスくんがいました。

「まずいちばん大きいぼくがおりるね。」
デラックスくんがかいだんをおりました。したからデラックスくんはアトラスくんにいました。

「ぼくのせなかにおりて。」

アトラスくんがデラックスくんのせなかのりました。

「めぐみちゃん、ぼくたちのせなかならのれるよね？」

めぐみちゃんは、アトラスくんのせなか、デラックスくんのせなか、そしてかいだんとそろそろとおりました。

「ありがとう。うまくおりられたわ。」

三びきはまたこうえんにむかってはしりはじめました。

しばらくいくとやまがみえてきました。三びきはげんきにやまをのぼりました。ちょうどようにつくくと、したにこうえんがみえます。

「わーい！」

三びきは、「こうらをそりのようにしてくださいかをすべりおりました。」

「こうえんとうちゃーく！」
三びきはつぼうにいて、それからぶらんこであそびました。

(おわり)

にこにこちゃんのなつやすみ

小学一年生

きょうは、にこにこちゃんのなつやすみがはじまるひです。

「まだかなあ？まだかなあ？はやくなつやすみにならないかなあ？」

と、にこにこちゃんは、なつやすみをたのしみにしていました。

なつやすみがはじまったので、にこにこちゃんは、わくわくとドキドキがとまりません。さっそく、なかよしのしかくちゃんと、さんかくちゃんてプールにいきました。にこにこちゃんとしかくちゃんはビートばんであそびます。さんかくちゃんはこわがりなので、うきわであそびます。しかくちゃんもさんかくちゃんも、にこにこちゃんとあそぶのをたのしみに行っていたので、すごくうれしいです。

いっぱいあそんだあとは、おひるごはん。

おひるごはんは、バーベキューです。おやまにあって、まずはテントをくみたてました。がんばってくみたてたので、あせをかいちゃいました。

テントができたので、さっそくバーベキューのじゅんびをします。やくものは、ウィンナーととうもろこしとなすとしたけとおにくとおにぎりです。にこにこちゃんは、ウィンナーがだいすきです。しかくちゃんはすきなものはとうもろこしで、さんかくちゃんがすきなものはしいたけです。みんなはやくたべたくてまちきれません。やっとやけたので、やけたものをみんなのおさらにもせました。

さっそくみんなで、

「いただきまーす！」
もぐもぐ

「おいしーい！」

にこにこちゃんはおかわりをしました。おいしくてだいまんぞくです。たべおわったあとは、みんなで、

「ごちそうさまー！」

そとはすごくあついで、バーベキューはたのしくておいしかったです。みんなできょうりよくしておかたづけをしました。

おそとがぐらくらくなってきたから、はなびのじゅんびをしました。そのとちゅうで、おともだちのおほしさまちゃんとハートちゃんとダイヤちゃんがやってきました。ダイヤちゃんが、

「いっしょにはなびをやるう。」

といったので、にこにこちゃんたちは

「いいよ。」

とって、いっしょにはなびをすることにしました。まず、みんなでパチパチはなびをやりました。はなびがパチパチするところがあ

もしろいからです。

つぎに、いろがかわるはなびをやりました。きみどりいろ、オレンジいろ、あおいいろ、あかいろにかわってきれいでした。みんなが、
「すごーい！」

といいました。さいごはせんこうはなびです。はじめはなびがおちてしっぱいしたけど、さいごはせいこうしました。せんこうはなびはむずかしかったけど、たのしかったです。はなびがおわったので、おほしさまちゃんたちはかえりました。

「たのしかったね！」

とってバイバイしました。

そのあとよるになり、てんたいかんそくをしました。もくせい、どせい、つき、かせい、きんせい、ベテルギウスがみえました。にこにこちゃんは、

「わー！すごーい！」

といいました。いろんなわくせいがみれたの

で、かんどうしました。おそいじかんになつてきたのでテントをかたづけます。にもつをもつてみんなおうちにかえります。にこにこちゃんはしかくちゃんとさんかくちゃんに

「バイバイ」

といて、おうちにかえってきました。

にこにこちゃんはねるしたくをして、ベッドにはいます。

「きょうはたのしいちにちだったなあ。」
とおもいながらねました。　おしまい

ペンギンのペンタ

小学二年生

むかし、森の水べに、ペンギンのペンタと鳥たちがすんでいました。ある日、鳥たちがさわがしいので、こえの聞こえる方に行ってみました。すると、鳥たちが、みんなでとくぎについて、話をしていました。そこへ一羽の鳥が、ペンタに、話かけてきました。

「ペンタは、とくぎあるの。」

と、聞いてきたので、ペンタは、

「ぼくだってとくぎあるよ。」

と、言っでしまいましたが、でも、ほんとうは、とくぎなんて、ありません。話かけてきた鳥が

「じゃあこんどのとくぎはっぴょう会にきなよ。」

と、言いました。ペンタは、え、と思ったけれど、

「行く行く。」

と、言っでしまいました。その日のよるおかあさんに、きょうのことを話しました。するとおかあさんは、

「じゃああしたのあさ、とくぎを見つげに行きましょう。」

と、言っでくれました。

つぎの日、ペンタとおかあさんは、とくぎをさがすためにでかけていきました。はじめにペンタは、とぶれんしゅうをしました。けれどとべずに頭をぶつけてしまいました。つぎは、木のぼりのれんしゅうをしました。けれど木にのぼれずおちてしまいました。つぎに、くじやくのまねをして、羽をひらこうとしました。ですが、ペンタは、羽がみじかいので、ひらけませんでした。とくぎを見つげることができず、ペンタは、なきながら目をつぶって、歩いていました。そして、い

けにおちてしまいました。おかあさんは、しんぱいしましたが、とてもよろこびました。ペンタのとくぎを見つけたからです。

そして、はっぴょう会の日がきました。ペンタは、はしって、とくぎはっぴょう会に行きました。すると、鳥たちが、けんかをしているではありませんか。ペンタが、けんかをしているりゆうを聞くと、一羽の鳥が、

「みんなとべることをじまんしているから、一ばんがきまらないんだよ。ペンタも、とべることがじまんなの。」

と、聞いてきました。ペンタは、にやっとして、いいました。

「ぼくは、およげることがじまんだよ。」と、ペンタが言うと、

「すごい、ペンタがゆうしょうだ。」

と、大きなこえで言いました。それをきいてまわりの鳥たちも、ペンタがゆうしょうだと思いました。ペンタは、しょうひんにドーナ

ツをもらいましたが、ペンタは、やさしいので、ドーナツパーティーをひらいて、とくぎはっぴょう会にきていた鳥たちにも、ドーナツをあげました。ドーナツをもらった鳥たちは、よろこんでいました。ペンタは、あのと

き、いけにおちてよかったなと、思いました。

うさぎのチャッピー

小学二年生

わたし、あいり。小学一年生。じつはね、この前、学校からかえったとき、ふしぎなことがおこったの。それはね…

「ただいまー。」

「おかえりー」

「えっ。チャッピー？なんでうごいてるの？なんでしゃべってるの？」

「えへーん」

「ママ、ママ！」

「あいり、おかえり。どうしたの？」

「どうしたのじゃなくて、ぬいぐるみのチャッピーがうごいているよ！」

「そうなのよ。びっくりよね！今日あいりのたん生日でしょ。おめでとう！」

「おめでとう」

「…ありがとう。チャッピーなんでうごいて

るの？教えて。」

「それはね…今日あいりのたん生日だから、とくべつに、まほうでうごけるようにしてもらったの。いっしょにケーキたべよー」

チャッピーは、わたしが四さいのとき、サントさんからもらった、うさぎのぬいぐるみ。ピンク色で、フワフワで。チャッピーは、わたしのだいじな友だち。

おたん生日会のあと、チャッピーが、こんなことを言ったの。

「あいり。なにか、なやみがあるでしょ？こっちおいで。」

「なやみは…パパとママには、ひみつだよ。」

「チャッピーね、ひみつのばしょがあるの。」

「ただの小さなはこじゃん。」

「ただのはこじゃないよ。手を入れてみて。」

チャッピーに言われたとおり、手をいれてみたら、はこの中に入っていたの。

「ここは、なやみそうだん室だよ。パパもママもないから、なやみを言ってみて。」

「うん……。いつも、チャッピーといっしょにねてるけど、オバケが出てきそうで、こわくて、ねむれないの。」

「こわいなら、この白いこなをオバケがきたらかけてね。イヤがって、にげちゃうから。チャッピーは、いつも、あいりのそばにいるから、だいじょうぶだよ。」

「うん。ありがとう、チャッピー。…ここ、ひみつきちみしたいだね。」

「そのとおり！あと三つ、おへやがあるよ。音がく室、ほけん室、こうさく室。」

「すごいね。かえるときは、どうするの？」
「四つのへやのどこかに、一つだけボタンがあって、それをおすと、もどれるよ。」

つぎの日。あさおきたら、チャッピーがいなくなっていたの。

あいりへ

チャッピーは、ちょっと、たびに出るね。もし、どうしても会いたくなったら、このクリームを手にもって、かべによりかかれば、チャッピーがたびに出たばしよに行けるよ。

チャッピーより

「ん？あの子、どうしたのかな。…ねえ、ここでなにをしてるの？」

「ジャックが、もうわたしのこといらなくて、すてちゃった…。」

「そっか……。ねえ、友だちにならない？」

「うん！わたしの名前はタマ。よろしくね。」
「わたしはチャッピー。よろしく。」

「チャッピーのもちぬしって、どんな子？」
「名前は、あいり。小学一年生。いっしょにあそんでくれるし、すごくやさしい女の子だよ。あつ、そうだ！うちにおいでよ」

「うん！どうやったら行ける？」

「キラキラシールをおいたから、だいじょうぶ　：あれ？シールがなくなってる…。」

わたしがついたばしょは、小さな森だったの。しばらくチャッピーをさがしていたら、前にチャッピーと行ったことがある、コスモスばたけを見つけたの。

「あつ、チャッピー　やっと見つけた。いっしょにかえろう。：あれ？チャッピー、おともだちができたの？：いっしょに行こう」

チャッピーは、ぬいぐるみにもどっちゃったけど、いつもそばにいるってわかった。もうオバケなんて、こわくないよ！

チャッピー。ずーっと、大すき

ふくろうたちのけんか

小学二年生

森のおくに、二羽のふくろうが楽しくくらしていました。でも、たまにけんかをするところがありました。

六月一日（曇りのち雷）

二羽のふくろうは、どちらが先に木の実を食べるのか、けんかをしました。

次の日は、あらいげんかをしました。

六月二日（晴れのち雨）

この日は、どちらが前のいすにすわるのか、先をあらそいさい後はけんかになりました。

六月四日（晴れ）

特にけんかはしませんでした。でも、二羽は、はなれて生活しました。

六月五日（曇り）

今日は、どっちが先に電車にのるか、あらそいました。

ある時です。この日のけんかはひどいけん

かでした。二羽のどちらが勝つのか分かりません。真夜中だと言うのに、ぜんぜん平気でけんかを始めました。町中が「ホーホー。」だらけになるまで、さけびそうです。

六月二十一日（ひょう）

この日のけんかは、

「朝から夕方まで木にとまってすごすのか」「夜から明けがたまで木にとまってすごすのか。」と言うものでした。一羽のふくろうが、

「ホーホー。そんなことなら、朝から夕方、なかまのふくろうがとんでいるかたしかめてくるぞーホー。」

そして、帰ってきたふくろうが言いました。

「ホーホー。ふくろうは一羽もとんでいなかったよー。ひょうにあたってあたまがボコボコで、もうくたくただー。ねむるじかんを

かえしてくれー。ホー……。」

と、プンプンおこってしまいました。

そうして、ふくろうが空をとびまわるじか
んは夜にきまりました。

もう、このけんかはおわりましたが、まだ
おこっています。

「ホー……。ホッホー……。」

おさかなくんと色々なお友だち

く おさかなくんシリーズ 2 く

小学二年生

おさかなくんはカツオです。ある日、さんごしように行きました。ほんそめわけべらくんに、おそうじをしてもらいに行ったのです。

「ほんそめわけべらくん、おそうじして。」

「いいよ。」

おそうじをしてもらいました。そこに、イワシくんたちがやってきました。みんなでおそうじをしてもらっている、ヒラメがいきなりおそってきました。びっくりしたイワシたちは、にげて、にげて、にげまわりました。そこに、アオリイカがきて、たすけてくれました。

「ありがとうございます。」

と、イワシたちが言いました。アオリイカが、「いいしょにつれて行ってあげる。」

と、言っていて、あん内してくれました。

みんなで行ってみると、とてもかわったものが、海でいにありました。おさかなく

「わあ、なんだろう。」

と、言いました。アオリイカが言いました。

「これをつくったのはだれだろう。」

そこに小さなフグがやってきました。

「ぼく、すごいでしょ。ぜんぶぼくがつくったの。」

と、そのフグが言いました。

「これはね、丸く、色々なもようになるように、体をつかってつくってるんだよ。」

「きみはだれ？」

「ぼくは、アマミホシゾラフグだよ。ぼくね、

このあたりしか見たことないの。だから、ぼくをどこかにつれて行って。」

と言うので、海りゆうにのって、とおくの広い海まで行きました。とちゅう、ふぐが気がつきました。

「あの白いもふもふは何？たべられる？」

「何だろう。」

八さいのおさかなくんにも分かりませんでした。

「行ってみよう。」

と、イワシが言いました。行ってみると、クラゲのようでした。フグがいいました。

「クラゲってたべるといいらしいよ。」

そこで、みんなたべてみました。そのあと、近くのホテルにとまりました。みんなつかれて早くねました。つぎの日、みんなおなかがいなくて、びょういんに行きました。そこにいたのは、ほんそめわけべらくんでした。

「おやどうしたんですか？」

「おなかがいいたいです。」

「じゃあレントゲンをとってみますか。」

そしてけっかをみてみると、

「これはプラスチックですね。」

と言われて、みんなショックでした。なかでもいっばいたべてしまったフグは、手じゅつをしなければならぬのです。

「ほかの人たちは、下ざいでようすをみましよう。」

フグの手じゅつの日になりました。

「はあ、手じゅつか。」

そして、手じゅつがおわりました。ぶじせいこうしました。そのあとはみんな、プラスチックはたべないように気をつけました。フグがたいいんすると、フグのおうちでおいわいのケーキをみんなでたべました。

おわり。

白ちゃんの大ぼうけん

小学二年生

白ちゃんは、いつもねむくてやさしいイルカです。ジャムパンと、アイスクリームが大スキです。

ある日、白ちゃんに、一まいの手紙がとどきました。名前が書いてありません。

「森のおくに、伝説の果汁がいっぱい入ったくだものがあるぞ。」

手紙には、そう書いてありました。白ちゃんは、目をかがやかせて、

「ぼうけんへ行こう。」
と言いました。

「ぼくは海で生きているけど、森へは行けないな。」

と言ってあきらめてしまいました。その時です。とをつきやぶってうんどうしんけいによさそう知らないイルカがとび出してきました。そして、大きな声で言いました。

「ラーイ！」

「おいおい、大じょうぶかい、きみ。」

「なにかなやみごとがあるのラーイ？」

白ちゃんはねむいのをこらえて言いました。

「：ありまーす：。」

「だったらなにラーイ？」

「森のおくまで行きたいんだけど：、ぼくは

イルカだから、りくには上がれないんだ：。」

「だったら、のせていくラーイ。」

「だってきみ、イルカでしょ。」

「ライじょうぶラーイ。」

かれの名前は、バネイルカのライル。たくさん体をきたえていたら、体の中にバネが入ったみたいにはねられるようになったらしいですよ。

白ちゃんはライルに言いました。

「伝説のくだものを見つけたんだ：。」

「小さい時、森のふかいところで、あまいに
おいがする木があったからそれかもしれラ
イ。」

ライルのせ中にのせてもらって、白ちゃんは
ぼうけんすることにしました。

およいで行くと、海の中に木のねっこが
あって、見上げるとドアがついていました。
少し、ドアがあいていたのでのぞいたら、中
から小さいイルカがピョコッと出てきまし
た。

「手紙、読んでクーれた？」

小さいイルカは、うれしそうに言いました。

「手紙を出してくれたのは、きみ？」

と、白ちゃんがきくと、

「クー。木のてっぺんの虹色りんごをとりた
いの？」

「虹色りんごって、ぼくたちがさがしていた
伝説のくだものなの？」

「クー。ぼくの名前はクーちゃん。クーだも
ののこのこと、教えてあげたかったの。」

でもどうやって？みんな考えました。

「いい考えがうかんだライイ。ぼくの上に二
ひきとものって、はねとばしたらいいと思う
ライイ。」

海のしおがみちると、なみにのって、今より
ずっと高いところへ行けます。

「さんせい！」

その日のよる。白ちゃんとクーちゃんは、
ライルにはねとばされて、空高くはね上がり
ました。そして、右と左から虹色りんごを
しっかりとばさんで、おちていきました。ラ
イルは、二ひきをしっかりとキャッチして、う
れしい気もちで、いえへかえりました。

つぎの日の朝、虹色りんごは、みんなで
ジャムにして、パンにつけて食べました。も
ちろん、アイスクリームもわすれずに。

そして三びきは、おなかいっぱい食べて、
楽しい気もちになったので、かぞくになりま
した。

ななちゃんのみーちゃんのおしぎな

小学二年生

夕方、ななちゃんは一人でお絵かきをしています。

ななちゃんは小学一年生の女の子です。今日は土曜日なので学校はお休みです。おとうさんは土曜日だけおしごとに行っています。おかあさんはかぜをひいたのでへやでねています。

「いつもならおかあさんも絵をかいてくれるのに：」
とつまらなそうに絵をかいていました。

そばでななちゃんがかっている三毛ねこのみーちゃんがお絵かきをしているテーブルのまわりをぐるぐると回っています。みーちゃんは五さいで、人げんの年でいうと三十六さいぐらいです。おとうさんとおかあさんと同じ年です。ななちゃんはみーちゃんは五年しか生きていないのにどうして三十六さい

いなんだろうとふしぎに思っていました。

するとみーちゃんはぐるぐる回るのをやめて「にゃー」とないて、ななちゃんのおふとんがしいてあるおし入れに入って行きました。おし入れはななちゃんのベットになっています。

「あ！ちよっと！みーちゃん！」
と言ったななちゃんもおし入れの中に入っ
ていきました。するとななちゃんとみーちゃん
のまわりがぐらくらくなりました。

「あれ？ここは？」
あかるくなっ
てからななちゃん
があたりを見まわ
していると：

「よう！ななちゃん！」
だれかがななちゃんをよびました。こえの
した方を見ているとはんそで
ティーシャツをきて、はんズボンをはいて立っている三毛ね

こがいるのです。

「だ、だれ？」

「ななちゃんが聞いてみると：

「やだなく三毛ねこのみーだよ？」

「え？でも立ってしゃべってる…」

「ここはどうぶつの町。今日はおまつりをやっているんだぜ。さあ、ななちゃん行こうぜ。」

そうして二人で歩きはじめました。

「ちよっとまで、おまえくつはいてないだろ。はい。」

みーちゃんがななちゃんにくつをわたしてくれました。ななちゃんはくつをはいてまたみーちゃんと歩きはじめました。そして二人はハムスターのやたいに行ってみました。体ぜんぶ黄色の毛のきんくまがハムスターフードをうっています。キャベツ、ニンジン、ヒマワリのたね。

「ようし買おうぜ！」

二人は買いものをしました。パンダの竹とん

ぼ、りすのどんぐりのネックレス、とらねこのお魚、いろいろ買いました。それから二人はベンチにすわって花火を見ました。よくみてみるとななちゃんとみーちゃんのおおみたいにみえました。

「みーちゃんとななだ！」

さいごに、ほかのどうぶつたちといっしょにいしょうをきておどりました。いしょうはピンク色でフリルがついています。一、二、三、一、二、三、むちゅうでおどったのでおあさんがかぜをひいたのをすっかりわすれてしまいました。ダンスがおわってななちゃんはどうとうとしてきました。八じのかねもなりました。みーちゃんにだっこされてななちゃんはねてしまいました。

あさになりました。六じのアラームがなりました。ななちゃんが起きるとそこはおし入れの中：ななちゃんはおくびをかしげました。ななちゃんはみーちゃんがだっこしてくれたことを知らないのです。ななちゃんのおし

入れにはおまつりで買ったものがちらばっています。竹とんぼ、どんぐりのネックレス。

「ななもうあさよ。」

おかあさんがあさごはんをつくりながら言いました。

「おかあさんもう元気になったの？」

「そうよ。一ばんねたら元気になったわ。」

「そっか、よかったね。おとうさんは？」

「おとうさんはへやでねているわよ。」

「みーちゃんは？」

「ソファでねているわよ。」

ななちゃんはみーちゃんがねているソファのところへ行って、

「ねえ、ななはどうやってかえってきたの？」

みーちゃんはソファからおりて、ななちゃんの足にまわりついて「にゃー」となきました。

フレンドパワー

小学三年生

ある大通りを、南と妹のゆいはと、建の3人が歩いていました。

「お姉ちゃん、疲れた。」

と、ゆいはが言ったので、南がゆいはをだっこしました。すると、反対方向から、風香とかなみが手をつないで歩いてくるのが目に入りました。すると、風香がゆいはめがけて走ってきました。風香はゆいはの事が大好きなので、ギューっとしようとする、なぜか四十cmくらいしか、近づけません。

もう、誰のしわざだか分かりますよね。そうです。悪い悪まのしわざです。風香は大好きなゆいはに近づけないので、泣いてしまいます。そんな泣き声を聞いた南は、大声でみんなをよびました。すると、みんなが集まり、大声で悪まにもんくを言いつけました。それでも全ぜんききません。

すると、目がいいかなみが何かを見つけてました。

「あれは、なんだろう。」

と、かなみが言いました。見てみると、色々な色のステッキが置いてありました。みんなはそれを見て、

「あれを使おう。」

と、言いました。みんなは色をえらびました。ゆいはは、紫。建は、緑。風香は、オレンジ。

南は黄色。かなみは、赤と、決めました。そして、ステッキをいっせいに悪まにぶつけました。すると、悪まがドーンとたおれました。すると、五人の耳に、声が聞こえました。

「わしは神様今から言う事をやれ。さっき拾ったステッキは、みんなの笑顔を守るものじゃ。やり方は、ボタンを押し、君たち五人で『やく』と言うんじゃ。」

と、神様が言いました。

「という事は今日から私たちがヒーロー？」
と風香がいました。

「そうじゃ、頑張っておくれ。」

と、一言残して、空へ登って行きました。

すると、みんなの口から「え〜」や「うっ
そ〜」という声が出ました。神様は、登る時
に、

「やれやれ」

と、ため息をつきました。その時、建だけ、

「これいいかも！」

と、言いました。その声が神様に聞こえまし
た。神様は笑顔になりました。するとみんな
も、

「やっぱりいいかも！」

という声が出ました。神様にその声が聞こえ
ました。ゆいはが、

「次、悪まが来た時に使おうよ！」

と、言いました。みんなもOKしてくれまし

た。

数年後、また悪まが出て来ました。五人は
ステッキのことをわすれています。しばらく
すると、五人はへとへとです。なぜかって数
年前と作せんが同じなんですもの。新しい作
せんを考えたのにわすれているんですもの。
少したつと、頭のいい建が気がつきました。
「みんな！新しい作せんを考えたじゃな
い。」

「そうだったね。」

「さあみんな『やあ〜』といおう。」

せーのポチっ。

「やあ〜」

とやりました。すると悪まが、

「ドーン」

とたおれる音が大きくひびきました。すると
かなみが

「なんかヒーローっぽいね。」

とうれしそうにつぶやきました。

「たしかに！」

と、みんなも口々に声を上げ、もりあがりま
した。

「これ、つかれなくていいかも。」

と、風香がいました。

「あっ、たしかに！」

と、みんなも気づきました。

さっきたおした悪まがピカーと光り、その
ままきえていくように、土にもぐっていきま
した。それを見てみんなは、

「よかったー。」

と、いいました。

「まあ、なんとか助かったんだからいいじや
ない。」

と南がいました。

「まあよかったね。」

とみんなは大きくうなずきました。

神様は今でも五人を見えています。

ありがとうの思い出

小学四年生

これは、わたしが小学生だったころのお話です。

わたしはみんなから「本の虫」と言われていました。本が大好きだったからです。けれどわたしは初めて「本の虫」と言われた時、とてもいやでした。わたしは、「本の虫」の意味を知らなかったので、本を食べたりするような虫だと思ったのでわたしは、心にきずをおきました。それから学校に行くのがいやになって一か月に一回しか学校に行きませんでした。「本の虫」と言われるのがいやだったからです。友達もクラスのみんなそして先生まで心配しました。

「みんな心配してるんだから毎日とは言わないけど週に一、二回は学校行ったら。一か月に一回はちょっと・・・」
と、お母さんが言うのと、

「いやだ！ぜったいいいやだ！お母さんには関係ないでしょ！」

と、言い返しました。そして、わたしは、一日中本を読んでいました。

そんなある日、わたしはいつものように本を読んでいました。

「あーおもしろい！何回読んでも楽しいな〜！」

そんな時本がピカピカピカピカと光って光の中からようせい、小人のような小さな生き物が出て来て言いました。

「わたしはルル。この本の案内人！よろしくね。あなたは？」

「わ、わたしは・・・り、りおん。」

「りおんちゃんて言うんだ！すてきな名前！」

「あ、あなたもす、すてき」

「ありがとう！ところでりおんちゃん。あなたこの本、好きなんだよね。」

「う、うん」

「だったらこの本の中に入れてみようよ！」

「え、そんなことできるの」

「かんたんかんたん。すっかりつかまって」

「うん」

「いっくよ、それ、それ」

「あれま、それ、それ」

「いたたたた。ここはどこ？」

「気がついた？ここは本の中だよ。」

「えっここが本の中？真っ白じゃん。」

「ふふ。このページはね。」

そしてルルの後をついていくと、そこはうさぎさんがおしゃべりをしているページでした。わたしはルルと色々な本の中に入りました。

「これが最初の本。あなたにぴったりの話。」ルルはそう言ってわたしの前を歩きました。

（わたしにぴったりの本　どんな本だろう。楽しみ！）

「今のあなたに一番ふさわしい本。学校に行っていたときのあなたと行かなくなった時のあなたの気持ちのちがいの本。この本をよんでみればきっと学校に行けるはず！わたしができるのはここまで。さようなら。」そう言ってルルはわたしにふしぎな物をわたしに消えて行きました。

きづいたらわたしの部屋にいました。

「さっきのはゆめ」

わたしはそういっしゅん思って立った時「ドサツ」と何かがももから落ちました。それを拾おうとすると手のひらの中に何かが入っていました。よく見るとお守りみたいな物でした。それをずっと見ていると、

「りおんちゃんが学校に行けますように。」とルルの声は聞こえました。ももから落ちた物を拾いました。それは本でした。わたしは

その本を読みました。本が読み終わると私の目はなみだでいっぱいでした。わたしは次の日から、また、ふつうに学校にかよいました。わたしが休んでいた間に転入生が来ていました。わたしはすぐにその子と友達になりました。わたしは小さな声で、

「ルル。新しい友達と学校に行けるようにしてくれてありがとう。」

とつぶやいた時、わたしは本当はルルは本案内人ではなく、こまっっている子を助けるよ
うせいだったのかなと思いました。

空想都市とぼく

小学四年生

ぼくは、地図をかくことが大好きだ。その中でも、頭の中で想像したまちを地図にあらわした、「空想都市地図」をかくことが特に好きだ。

そんなぼくが今作っているのは、「レインボーシティ」という名前の地図。レインボーシティには、変わった形の建物や、世界的に有名な高い山、どこまでも続く広大な海もある。その地図をかくのに、今日はもう三時間も使っている。まだ地図はかき終わっていない。明日は予定があるから、今のうちに完成させたいのだが…。

さすがにもう疲れた。本当は、ゆっくり休みたい。

それでも、ぼくは地図の続きをかこうと、ノートを開こうとした。その時…

いきなり、強い風が吹いたかと思うと、僕

は何かに吸い込まれた。そして、そのまま暗闇の中に落とされた。

気が付くと、僕はある建物の屋上にいた。「ここはどこだろう？」

そんなことを考えながら屋上からの景色を眺めていて、ぼくはあることに気付いた。

ぼくの目にうつる景色には、登るのが難しい、変った形をした建物…。全部、見たことがある気がするぞ。

…ここって、もしかしたらレインボーシティ？ いや、そうだ。そうにちがいない。だって、ここにはぼくが地図にかいたのと全く同じ山や海や建物があるもの。

そう思いながら屋上をウロウロしていると、ぼくは一人の男に出会った。その男はとても魅力的で、なんとなく話したくなる雰囲気

気を放っている。話してみようかと、ぼくは男に近寄った。すると…。

びゅううううっ！

さっきと似たようなことが起きた。急に強い風が吹いてきて、何かに吸い込まれた。ぼくは怖くて、思わず目をつぶった。そして…。

次に目を開けた時、僕は見知らぬ小さなヘリコプターに乗っていた。そこには、ぼくと操縦士一人の、合わせて二人しかいなかった。

：このヘリコプターは、一体どこへ行くのだろう？ 気になって、操縦士に「どこへ行くのですか」と聞いた。ぼくは、「あっ」と声を出しそうになった。操縦士が、さっきの魅力的な男とそっくりいや、同じだったからだ。でも、色々と話しているうちに、そのことはすっかり忘れてしまった。

「どこに行くかだって？ ああ、オレは、このまちにある家に帰るところだよ。で、話を交えるけど、君は誰だい？ 名前は？」

「ぼくは、リヨウスケです。あなたは？」

「オレの名前は、ロッキーだ。ところで」

ロッキーさんは、そこで少し言葉を切り、操縦席にあるレバーを動かしてから、言った。

「君がいいなら、このまちの色々なことを教えてあげるよ。どうだい？ 今日特別に、夕ダでオレのヘリに乗らせてあげるよ。」

「やった！ いいんですか？」

「もちろん！」

その後、ロッキーさんは、ヘリコプターから見える建物などのことを、全部話してくれた。ぼくがいたレインボーシティの地図ではまだ出来ていなかったところにも、ここにはビルが建ったり、公園が出来ていたりしていた。これについてもロッキーさんは話してくれたし、おまけに、レインボーシティの歴史や人々についても教えてくれた。

こうして、二人の楽しい時間はあっという間に過ぎ、気付くと空には星が輝いていた。もう帰る時間だ。

さよならを言い、寂しそうに歩き出したぼ

くに、ロッキーさんは、一冊の本をくれた。「これは、レインボーシティについてかかれた本だ。後でぜひ読んでみてね。」

ロッキーさんの笑顔が見えたかと思うと、急に、目の前が真っ暗になった。

気付くと、ぼくはソファーに寝転んでいた。どうやら、疲れて寝てしまっていたらしい。でも、起きてすぐに、さっきまでの出来事が夢じゃないということが分かった。机の上に、ロッキーさんがくれた、あの本が置いてあったのだ。

そういえば、ロッキーさん、「この本にはレインボーシティについてかいてある」って言ってたっけ。ということは、レインボーシティの地図に役立つことがかいてあるのかもしれない。

そう思って、ぼくはあわてて、その本を開いた。

リンネと本

小学四年生

昔、昔、大きなおやしきに住む、リンネという少女がいました。

リンネのお父さんは、小説家ということでも有名でしたが、リンネは本がきらいでした。

ある日、リンネがブックパーティーにしようたいたされた時のことです。リンネは、本のパーティーとは気づかず、なぜかとも行きたくなりました。

パーティーには、リンネが一番といってもいいぐらい、大きらいな本ばかりがズラリとならび、おまけにリンネのお父さんの本ばかりです。

「なんなのよ。こんなのパーティーなんかじゃないわ。」

と言った時、まるでまほうのようにパッとふしぎな男があらわれました。黒いハットをか

ぶり、顔が見えません。

「こんにちは。私はパーティーのしゅさい者です。」

「ちょっと、あなた、そうパーティーのしゅさい者さん。なんなのよ。こんなのまるでパーティーじゃないじゃない。」

リンネは今にもいかりがばくはつしそうです。それでも、ふしぎな男は落ち着いて言いました。

「わかってはいませんか。まわりには、たくさん人がいるではないですか。」

「は、どこに人がいるのよ。」

「私には見えるのです。わかりやすく言えば、とうめい人間です。あなたは、とうめい人間が見えませんか。」

「え、ええ：もちろんよ。」

「本を読んだことはありますか。本を読むと

とうめい人間もおばけだって見えてしまします。人に想ぞうというすばらしいのう力があるかぎり。」

「そうなのね。でもぶあつくて、おもしろくなさそうじゃない。」

とリンネが言いました。でも、ふしぎな男もまけてはいません。

「本当に面白いのでぜひ。」

とふしぎな男がさし出したのは、「ふしぎな話」という本でした。リンネはとうとうあきらめ本を手に取りました。そして読み始めました。その話は、おばけと友だちの少女が、おばけの姿が見えなくなってしまうが、本を読んでまた再開できたという話。でも、リンネは想ぞうとは言ってもまさか本当におばけたちが見えるとは思っていません。読み終わって、

「お、おもしろい。でも、やっぱりとうめい人間やおばけなんて、見え…。」

そして、顔を上げたリンネは目をこすりました。ふしぎな男の言ったとおりたくさん人がいるのです。にぎやかでとっても楽しそうです。

「すごいわ。まるで本当にダンスパーティーだわ。」

「そうです。みな、色いろな物を想ぞうして、楽しい世界そして、未来となっているのです。」

リンネは、しばらく楽しんだあと家に帰りました。今日あったでき事をお父さんに話したのです。すると、

「ハッハッハ。そんなに楽しかったんだな。よかった。よかった。」

「なんでそんなにわらっているの。」

「だってそれは、わた…なんでもない。」

「も、もしかしてあのふしぎな男はお父さんだったの。」

とリンネはとってもおどろいています。

「あ、ああ。本のすばらしさを知ってほしかったんだよ。」

「うん。ありがとう。とっても本が好きになったわ。これからは、色いろな本を読むわ。」

リンネのお父さんは、小説家ということでも有名です。そして、リンネは本が、大好きです。

花火

小学五年生

五年一組の仲良し三人組、リサ、サラ、ラン。休み時間は、いつもいっしょにすごしている。昼休みには、大きなたつぼうで遊ぶことが多かった。いつものようにてつぼうで遊んでいると、先生が三人をよんだ。

「お花に水やりをしてきて。」

三人は、水をくみ、お花にたっぷり水をあげた。ちよつとふざけて水をまいたら、きれいな虹ができた。七色にキラキラと光ってとてもきれいだっただので、

「花火みたいだね。」

と三人で笑った。

五、六時間目は、図工の時間だった。

「好きな絵をかきましょう。」

と先生が言った。みんな、思い思いに動物や、花や、乗物の絵をかいている中、三人は、話し合っていないのに、花火の絵をかいた。ラ

ンの花火は、夜空に広がるキラキラした大輪の花火。サラの花火は、いろいろな色や形の花火。リサの花火は、せんこう花火をしている絵だった。

次の日、学校から花火大会の手紙がくばられた。三人は、いっしょに花火大会に行く約束をした。毎日わくわくして、休み時間や下校の時は、その話ばかりだった。ゆかたを着ていく？かき氷は食べたいよね？雨ふらなといいいいなあ。毎日、同じような話なのにとっても楽しかった。

花火大会一週間前、三人は待ちきれなくて、せんこう花火を買った。パチパチパチときれいに飛びちりすぐにきえてしまった。

「きれいだけど、打ち上げ花火にはかなわないなあ。絶対三人で見ようね！」

とランが言うと、リサとサラは、大きくうな

ずいた。

花火大会の当日、三人の中でも一番楽しみにしていたランが、かぜをひいていけないとランのお母さんかられんらくがきた。

「ラン、とっても楽しみにしていたのに……」
「どうしたら三人で花火が見れるんだろう。」

リサとサラは考えた。三人での約束はなく なっちゃったけど、なんとなく待ち合わせの場所に二人はきていた。

「そうだ ランの家に大きなまどがあって、そこから花火が見える！」

とサラがいった。リサとサラは、ランの家におみまいに行くことにした。ランの家につき、インターホンをならすとランのお母さんが 出た。

「熱は下ったけど、うつるといけないから、おみまいは、気持ちだけうけとっておくね。また元気になったら遊んでね。」

「どうしよう。ランと花火が見れないね。」
とリサがあきらめて帰ろうとした時、サラが いった。

「あ、おばさんお願いがあるの……」

「なんでこんな日にかぎってかぜひくんだ ろう。」

ランはくやくしくて、まくらをドシドシたいた。その時、

「ラン、ちょっといい？」

お母さんが声をかけた。

「実はね……」

「ドドドーン」

と大輪の花火が上がり、赤、青、黄に光り、パチパチとちっていった。それは、まるでランの図工の絵のようだった。次に小さな花火が、

「パパパパッ」

とあちこちにかさなり、きれいな赤、オレン
ジ、緑ので、まるでサラの絵のようだった。
ランは、まどから花火を見ていた。時おり下
を見て手をふった。リサとサラは、ランの家
の前で花火を見た。時おり上の方を見て手を
ふった三人は、花火にとてもかんどうした。
ランのかぜもとんでいった予感がした。ラン
に向かつて

「きれいだったね。」

とリサとサラがいうと

「うん。」

とランが手でまるをつくった。

「来年は、三人そろっていっしょに見よう
ね。」

いやなこと、かなしいこと、心のなやみな
ど花火を見ているとふっとんだ。かき氷も、
ゆかたもなかったけど、とつても心にのこっ
た花火大会だった。

りおなと七色のつえ

小学五年生

りおなは、母から何度も聞かされたお話があります。それは、いつも同じ言葉で、

「この家には、守り神がいてね、その守り神は、ま女なの。その守り神のつえは、七色に光っているわ。そのつえを見つければ、この家の守り神になれるわ。ま女があると見つけられるけど、子どもにしか見つけられない場所にあるらしいのよ。」
というものです。

りおなは、好奇心旺盛の七才の女の子です。りおなは、いつもその七色のつえに会ってみたいと思っていたのでした。しかし、母が子どもをどこを探しても見つけられない位、簡単には見つからないようです。休日、りおなは、家じゅう探し回りました。けれどそう簡単には見つかりません。父に七色のつえの事を聞いてみましたが、母とほぼ同じこ

としか言いません。りおなは困りました。学校でも考え込みました。その夜もりおなは、眠れませんでした。とその時何か音がしました。ぬいぐるみを抱いてそーっと音の方へ行くと、母が洗面所で何かをしていました。よく見ると、母が青いつえを持っているではありませんか。りおなは勇気をふりしぼり言いました。

「お母さん？何してるの？」

りおなの声を聞いて、母はおどろきふり返りました。母は、りおなに言いました。

「りおなどうしたの？」

びっくりした様子であわてて青いつえをサツとかくしました。あきらめたように話し始めました。わが家には、先祖代々五人のま女が誕生すること、五人のま女が揃えば何が起きること、そしてつえの色は、赤、緑、

青、紫、七色の五種類ということ、ま女の秘密を話してくれました。母は、

「さあもう寝なさい。続きはまた今度ね。」そう告げると、りおなを、寝室にうながしました。りおなは、わくわくしすぎてなかなか眠れませんでした。

母が言っていたつえは五種類あり、そのうち三種類は母をいれてすでにあるようです。残るのは、七色のつえと紫のつえのみ。

「赤は炎の神、緑は風の神、青は水の神、紫は大地の神、そして七色は炎、風、水、大地全てが使えるの。お母さんは青のつえに選ばれたから、七色のつえは、なかなか探せなかつたみたいね。」

「お母さん、ま女だったんだね。すごいなあ、すてきだなあ。私もま女になりたい。」りおなは七色のつえを見つけないという気持ちから、ま女になりたいという気持ちに変わっていました。

次の日からりおなは、より一層つえを探すことに集中しました。しかし、集中しすぎて、学校の宿題を忘れてしまったり、お手伝いをお願いされているのにやらなかったり、お友達との遊ぶ約束を忘れてしまったりしました。母はこの様子を見て、

「りおな、一生けん命になることは良いことだけど、バランスをくずしてはいけませんよ。今大切なことは何？自分でよく考えてごらん。それがわかるまでつえを探すのは禁止。」禁止と言われ、一日も早くま女になりたいりおなはがっかりしましたが、最近の自分の行動を思い返してみました。そして、つえを探すことばかりに気持ちがいつてしまつて、他のことはどうでもよくなつていたことに気が付き、とても反省しました。

（何事もバランスが大切なんだ。）りおなは心に言い聞かせ、次の日から勉強やお手伝いを今以上にがんばりました。お友達にもあや

まり、仲良く遊ぶようになりました。

八才になったある日、りおなが本を読んでみるとすつと頭の中にある言葉が浮かびました。しかしりおなは気に止めず、本を読み続けました。今までもそういうことはありましたが、いつもあてにならないのです。でもあまりにもうるさいので母に聞いた所、「己を信じるといふ言葉があるわ。もしかしたら、つえからのメッセージかもしれないよ？耳をふさがないで素直に聞いてごらん。」

りおなは今まで信じていませんでしたが、信じてみようと思いました。目を閉じてその声を聞いてみました。すると、

「かくれんぼ。見える。見える所。」

と言っています。かくれんぼといえ、小さい頃かくれんぼをした時に床の下に入る秘密の場所があることを思い出しました。急いで小さな出入口をのぞきこむと、ぼうのよう

なものが転がっていました。何とかしてようやく手に取ると、そのぼうはキラリと光り、美しい七色のつえに変化しました。その美しさにりおなはうっとりしました。母は、

「りおな、おめでとう。ようやく見つかることが出来たね。でもこれでま女になれたわけではないよ。自分の心と声を信じてすてきなま女になってね。」

りおなは気持ちを改たにつえを見ました。

時計台

小学 五年 生

私はこまっていた。クラスの春美が、転校する事になったからだ。それで、今日の宿題は、「春美への最後のプレゼントを、来週までに作る」ということだった。

正直、あまり工作も得意ではないし、春美ともあまり仲良しではなかったので、何をあげるかすごく迷っていた。

考えること三十分。近くの時計台が、五時を告げるアラームを鳴らしている。

そういえばあの時計台、「五時半ぴったり」に、時計台の後ろで願い事を言うと、願いを叶えてくれる」っていううわさがあるんだっけ。そんなうわさ、ちっとも気にしていなかったけど、一回、行ってみようかと思った。

春美のプレゼントなんか忘れて、時計台へ走った。よく考えれば、来週までに作ればいいんだし。

何をお願いしよう。私は、頭の中で考えた。「よし、これだ。」と決めようとする、「いやいや、こっちじゃないか。」と思えてくるし、やっぱり一つに決めるなんて無理なんじゃないか、って思えてくる。

時計台を見ると、まだ五時十五分だ。良かった。あとの十五分で選んでおけばいいんだから。

そう思って歩き出すと、時計台の下に手紙が置いてあるのを見た。新しくて、一つのもついでにない。私は、なんだかこの手紙を読みたくなった。ふうはしていなかったから、すぐに取り出せた。

手紙は、こうだ。

「時計台さん。私はもうすぐ引っこします。いつも友達と待ち合わせをしたのは時計台さん、夕はんの時間を教えてくれたのは時計

台さん。いつもありがとうございます。」
変な手紙。時計台に、文字はよめないのに。
でも、次にかいてある名前を読んで、私は息
を飲んだ。

「川野^{かわの} 春美^{はるみ}」

それは、春美の名前だった。

そのしゅん間、私に名案がうかんだ。願
いごととも忘れて、走って家に帰り、家にあるあ
き箱を手にとった。

時計台だ。この箱で、春美が好きな時計台
を作ろう。どんなに下手でも、どんなに似て
いなくても……。あの時計台を、少しでも思
い出せるような、そんな時計台を作る。

むねがワクワクして止まらない、初めての
感覚。それが三時間くらい続いて、やっと完
成した。そして私は、つかれがたまってね
むってしまった。

一週間たち、私は春美に時計台をわたした。
春美は、少しおどろいたが言った。

「——知ってたの？私に、時計台のこと好き
だってこと。」

私はあわてて返した。

「うん。——ま、まあ、知ってたよ。」

手紙を見たなんて、絶対に言えない。でも、
春美は笑っていった。

「ありがとう。私、すっごいうれしいよ。」
時計台のアラームが、きちんと十時を告げ
る。それを聞くと、私たちはいっしょになっ
て笑った。

——あの時計台は、本当に、すてきな物を
くれた。——新しい、春美という友達を。

親友と入賞

小学五年生

うれしい、でもどこかうしろめたい。帰りの会で担任の先生から賞状をもらった。ぼくはそんな複雑な気持ちだった。みんな「すごいね！」と言ってくれたが素直に喜べなかった。

夏休みの事だ。ぼくは親友の颯太と公園で遊んでいた。二人とも疲れてベンチに座った時、ぼくは自由研究について相談した。

「あ、あのさ、そ、そのなかなか自由研究が決まなくてさ、そのさ、前に颯太は読書感想文にするって言ってたじゃん。だから俺もそうしよかなくて…。」

「いいんじゃない。」

「でさ、そ、そのさ、俺やったことないからさ、読書感想文。颯太は何回も特選とってるじゃん。もう出来てるんでしょ。」

「まあ、うん。」

「じゃあ、そ、その参考に家に持ち帰らせてくれない？参考にするだけだからさ。」

「うん、いいよ。大丈夫？さっきから様子が変だけど。」

「大丈夫だよ。じゃ、じゃあ明日持ってきてくんない。」

「オッケー。」

「じゃあ、今日が十日だから二十五日に返すね。」

「分かった。」

そして次の日、ぼくは颯太から読書感想文を貸してもらい、家に持ち帰った。そして颯太の作品を一語一句まねをして原稿用紙に書き写した。自分でもダメだとは分かっている。颯太に「参考にするだけ。」と嘘をついてしまったことも分かっている。でも、そういう事をしてまでとりたい大事なものがある。

入賞だ。

ぼくはどんな時でも普通だった。勉強も、運動も。クラスでも目立たない存在。それでぼくは、ちよつとだけ、ちよつとだけでも目立ちたかった。みんなに注目されたかった。だから、こんな最低な事をしてまで入賞がとりたかった。ぼくの学校は廊下にかざったりもせず、入賞をとっても、賞状を渡される場所はクラスだから、違うクラスの颯太にはバシない。帰りに会わなければいいんだ。そして、そっくりそのまま書き写し終わって颯太に返しに行った。颯太に

「いいのができたか？」

と言われたので、

「ま、まあね。」

読書感想文を借りた時もそうだったけど、どうしても声が震えてしまう。親友をだましているからだろう。

「入賞、とれるといいな。」

その「親友」の一言で我に返る。ぼくは親友のネタを使ってしまった。しかもその事は黙っている。これが「親友」と言えるのだろうか？ ずっと自問自答し続けた。

そして今日。賞状を渡されたぼくは、颯太に見つからないように帰ろうとした。だが、「入賞とれたんだって？ 友達から聞いたよ。」

後ろから声をかけられた。ふり返ると颯太がいた。

「ま、まあね。」

「どんな作品？」

盗作したのがバレてしまう。謝るしかない。

「ご、ごめん。じ、実は…。」

「言わなくていい。」

「えっ。」

ぼくは思わず下げている頭を上げてしまった。

「知ってた。」

「お前、最近ずっと様子おかしかっただろ。」
確かに声は震えていた。でも、

「それだけで分かったの？」

「お前とはずっと『親友』だからな。」

颯太はそう言って笑った。

「でも、本当にごめん。」

「次はさ、二人で一緒に『入賞』とろうぜ。
別々の作品でさ。」

「うん、分かった。でも、本当にごめん。」

「いいよ。お前の『どうしても入賞がとりた
い。』すごい分かるから。あ、そういえば……。
そう言ってランドセルの中を探している。」

「あ、あった！これ見てよ。」

そこには俳句の入賞の賞状があった。

「いや、俳句で入賞とっておどろかせようと思
って。」

「すごいよ、颯太。」

「ありがとう。じゃあ来年、がんばろうぜ！」

「うん！」

ぼくと颯太は「親友」と言えるのだろうか？と自問自答していたが、その答えも今は
かんたんだ。その答えはもちろん、ぼくと、
颯太は、親友だ。

〈おわり〉

師匠のカラフル 弟子のモノクロ

小学六年生

私の名前は花楽風流。ぼちぼち有名な画家ですの。仲間には、からくふうるを略して、

カラフルと呼ばれてますの。今は誰も見た事の無い色を求めて、世界中を旅してますの。

でも、旅を続けて一年七ヶ月と八日目。良い色が全く見つからないの。弟子も居ないし、色も見つからないし。もう、うんざり。弟子が居たら良い色が見つかるのかしら。色探しに加えて、弟子探してもしてみましよう！

早速、こんな山奥より、人が沢山居そうな町にでも行こうかしら。そうね：色々なアイディアがほしいから、弟子は自分とはちがう異性が良いわね！老若男女問わず、笑顔になっってくれるような絵を描きたいから面白いアイディアを出してくれそうな若い子が良いわね。よし。私の確かな目と頭をくしして、想像にぴったりな子を探しましょう！ま

ずは、沢山の人が行き来する商店街に張り込みね。

それにしても、もう一時間もたったのね。こんなに待っても誰一人見つけれないなんて…。でも、よく考えたら、絵を描く事が好きなら、今も絵を描いているのじゃないかしら。私のバカ！もっと早く気付けば一時間も無駄にしなかったのに！この町で絵を描くとしたら、どこかしら。そうね…。やっぱり、町より、牧場ね。のびのびとした牧場！いいわあ。もし居なくても、山や田畑があるもの。

よし着いたわあ。誰がいるかしら。えっと、今はまだ居ないわね。でも、もう少し探しましょう。あっ居た！うーん：若くて異性で…。なによりイケメン 決めた！あの子にする！私の直感がそういってるもの。

ねえ君！絵、描くの好きなの？

「：まあ：はい」

その絵すごくいいわね 誰かのお弟子さん？

「いえちがいます。描くのが好きただけです。」

まあでは独学ね！じゃあ私の弟子になる？

「：弟子？：というかどなたですか？」

あら、私の事知らないかしら。名前は、花楽風流。もちろん画家よ。ぼちぼち有名なんだけど：。でね、今、誰も見た事のない色を求めて旅をしている最中なの。でもなかなか良いアイデアがうかばないから、弟子も探しながらって感じ。

「：そうですか。でも一人で描くのが好きなので。ぼくは失礼します。」

あら、じ、じゃあ一つだけお願いがあるの。私が描いた絵を見てくれないかしら。ちなみに九枚よ。あと、あなたの事も教えてくれる

かしら。

「二つですよ。：それをしたら失礼しますよ。」

ええ！わかったわ。ま、弟子になってもいいしね。

「じゃあ、早速絵を：」

その前に君の事を教えて。私は教えたのだから。

「はいはい。名前は望野空朗。十七歳。友達からは、モノクロと呼ばれてい：。」

モノクロ！いいじゃない カラフルの私と、ぴったりね。あっごめんささいね。

「：よく描く絵は、のびのびとした自然の多いところ。この町は、自分の好きな絵を描くために旅をしていて見つけました。」

私達似ているわ！この町を旅で見つけたところ、自然を描くところ。それに、カラフルとモノクロってのも相性がいいわ。よし！絵を見せるね。町と田んぼが一枚、川と畑が

二枚、山が三枚よ。どれも自信作だからね。じっくり見てね。

「（すごい。本当にこの人が描いたのか。この人の見ためや口調からは想像できない優しい絵。でも力強い。この人の自信や図々しさはここからきているのか？…弟子…）」
すごいねモノクロ君。とても真剣に見てて…。

「あっあの！ぼく弟子になれません。ぼくが弟子だなんておこがましくて…でも、もしよければ、先生と絵を描きたいので、旅は一緒にさせて下さいっ！」

モノクロ君。君が私の絵を見ていた間、絵を見させてもらったわ。良い絵を描くわね。久しぶりに人の絵を見て感動したわ。私と旅に出て絵を描くなら、ぜひ一番弟子になってほしいのよ。

「…はい！ありがとうございます。一番弟子としてよろしく願います。」

よし決まりね。君の才能を私が見つけたし、

きっといい師匠と弟子になるわね。さっ行くわよ。私の仕事場に。色探しもするわよ。

「了解です。あの…色の事で提案があります。まわりの人達と違う事をしてみませんか。自分の考を貫くといいかもしれせんから。例えば、混ぜない色を混ぜたり、色々な物で色水を作るとか。」

なるほど！やるわねモノクロ君！早く帰って実験よ！モノクロ君！これこそ才能ね。ワクワクするわね！楽しみだわ！工夫をするのね。

「…ありがとうございます！カラフルさん！」

勇気の温泉

小学六年生

夏休み。ぼくはお父さんの運転する車の中にいた。行き先は温泉。ぼくの家族は温泉が大好きだ。

旅館に着いた。三 一号室に案内された。お父さんとお母さんは早速温泉へ行く準備を始めた。早く温泉に入りたい弟と妹は、部屋の中を走り回っている。

「勇人。お父さんは少し遅れて行くから、先に拓未と温泉に入っていてくれないか？」

とお父さんをお願いされた。ぼくは、「わかった。でも早めに来てね。」

とお父さんに伝え、拓未と一緒に温泉へ向かった。

早く温泉に入りたい拓未は、急いで温泉へ向かう。ぼくは拓未を追いかけていたが、途中でつまずき転んでしまった。

（あれ？目の前が暗くなってきたな・・・）
ぼくはそのまま気を失ってしまった。

目が覚めると、ぼくは三 一号室にいた。弟が一人で困っていると思ったぼくは、あわてて温泉へ向かった。男湯ののれんをくぐったぼくはおどろいた。右も左も動物だらけだったのだ。

困っているぼくに、おかみさんのような格好をしたタヌキが声をかけてきた。

「ここは動物の温泉よ。人間はふつう入れないんだけど；でも子どもなら大丈夫よ。」

人間の子どもがめずらしいのか、温泉に来ていた動物たちがぼくに話しかけてきた。でもぼくは話が出きない。ぼくは気が弱く人見知りのため、すぐに緊張してしまうのだ。

「そうだわ。『勇気の温泉』に入ってみなさい。」

ぼくの様子を心配したタヌキのおかみさんがそっと教えてくれた。

おかみさんが教えてくれた『勇気の温泉』

へ向かうと、先にクマが入っていた。ぼくに
気付いたクマがぼくに話しかけてきた。ぼく
はモジモジ話せない。それでもクマはぼくに
話しかけてくれた。ぼくは（このクマとなら
話が出る気がする）となぜか思った。

クマと会話するうちに、なつかしさがよみ
がえった。ぼくはクマをじっと見た。何か見
覚えがあった。（…あれ？ケンタ？）

ケンタはぼくが小さい頃に家族の一員
だった犬の名前だ。ぼくとケンタは仲が良
かった。ケンタが病気になってお別れする時、
わんわん泣いたことも覚えている。ぼくはク
マに、

「あの…ケンタ？」

と聞いた。クマは

「そうだよ、勇人くん。やっと気付いてくれ
たね。」

と答えた。犬のケンタはクマに生まれ変わっ
ていた。ケンタは『勇気の温泉』の評判を聞
いて、遊びに来ていたと教えてくれた。

「勇人くん、ボクは見た目は強そうなクマな

んだけど、本当は気が弱いんだ。この温泉は
勇気をくれる温泉なんだよ。」

ぼくはケンタとたくさん話をした。お父さん
とお母さんの話。ケンタと別れてから生まれ
た、弟や妹の話。それからぼくの話も。

楽しい時間はあっという間に過ぎた。

「勇人くん、ボクはそろそろ帰らないと。勇
人くんもお父さんやお母さんが心配してい
ると思うよ。勇人くんとたくさん話が出て
楽しかったよ。」

「ぼくも楽しかったよ、ケンタ。また会える
かな？」

ぼくはケンタに聞いた。ケンタは笑顔でうな
ずいた。

温泉を出たぼくは、タヌキのおかみさんの
もとへ向かった。

「おかみさん、『勇気の温泉』を教えてくれ
てありがとうございました。」

と自分でもおどろく声の大きさでおかみさ
んにお礼を言った。

「温泉の効果はあったようね。あとこれは人

間の世界に帰る時に必要な鈴よ。なくさないで持ち帰るのよ。」

鈴をしっかりにぎり、温泉をでたぼく。目の前が暗くなり気が付くと三 一 号室で寝ていた。

「やっと気が付いたか。心配したぞ。」とお父さんが言った。

(あれ? 夢? : いや、夢じゃない!) ぼくの左手には、おかみさんから受け取った鈴があった。

「お父さん、今から温泉に入ろう。」ぼくは言った。

「今すぐか? 大丈夫か? 勇人がハキハキ自分の思いを伝えてくれて、お父さんはうれしいぞ。」

ぼくは次にケンタと会った時に恥ずかしくないような行動をすると決めた。きつとケンタはぼくのことを心配して会いに来てくれたのだから。